特別寄稿

『農協ビジネスの新展開～JA浜中町が目指すもの』

浜中町農業協同組合 代表理事組合長

石橋　榮紀（いしばし・しげのり）

略歴：1940年生まれ。1964年3月千葉工業大学工業経営科卒業後、同年4月酪農就農。1972年6月浜中農業協同組合理事、1981年8月同専務理事を歴任の後、1990年6月同組合長理事就任（制度変更により1993年6月代表理事組合長）。1996年5月（社）北海道乳牛検定協会会長、1997年5月釧路地区農協組合長会会長、同年6月北農中央会ホクレン農協連理事就任。2009年7月㈱酪農王国代表取締役となる。

JA浜中町の概要　当JAは北海道東部の釧路と根室のちょうど中間に位置し、二つの行政区にまたがる生産組合員戸数200戸足らずの農協である。夏は北太平洋からの海霧の影響により冷涼なため、作物はチモシーやクローバーなどの牧草のみで、酪農単作の専業農業地帯である。1万5千haの草地に2万3千頭の乳牛が飼育され、販売高は86億円になる。生産される生乳は主にハーゲンダッツアイスクリームの原料として使用され、全国の消費者に食されており、組合員は生乳の品質レベルが最高の水準にあるとの自負を持って日々生産に取り組んでいる。

酪農専業の総合農協として昭和56年土壌・飼料分析および生乳検査のための全国初の酪農技術センター開設、子牛の育成牧場、酪農ヘルパー、コントラクター（農作業の外部化）、平成14年酪農生産現場のすべての情報を提供できる全国初の酪農情報システムの確立など、生乳生産にかかわるすべてのことを実施しており、生乳の生産履歴を出すことができる全国で唯一の農協である。

担い手（人材）育成の取り組み　離農跡地の再編を行い生産基盤維持を図ることを目的として昭和58年より担い手として町内外からの新規就農者の受け入れを実施してきた。しかし、酪農就農を夢見て研修に励んでいる人材を適時にかつ適切？に見つけることは簡単ではなかった。牛を飼うことは一定の期間やはり現場体験が必要である。そのため就農者確保に向けて平成3年農協単独で全国に先駆け就農者研修牧場を開設した。常時、酪農未経験の三組の夫婦が研修に入っており順次離農跡地に就農し、現在までに町内酪農家の一割を超える25戸の新規就農者を受け入れている。

既存組合員の子弟は毎月営農講座を開設し大学との協調で行なう出張講座も含めて、経営者としての知識と能力の向上のため学習に励んでおり、将来の人材養成のため小中学生の農協学習塾も毎週開設している。ニュージーランドへの酪農研修を修了した組合員・職員はこの十年間で延べ百名（うち約7割が女性）を超えている。

中小企業家同友会加入について　生乳の品質管理をよりきめ細かく行なうために、生乳貯蔵庫（バルククーラー）内の生乳温度を、24時間管理するための温度計開発を釧路の企業と共同で行い、平成16年全国に先駆け農協傘下全組合員のクーラーに設置した。その企業の社長から中小企業家同友会という組織のことを紹介され、かつ加入を勧められた。

JA浜中町は前述のようにいくつも全国初の事業を展開してきたが、いつも行政と系統の壁に突き当たっている。原則的なことで言えば農協という組織はクローズドシップで閉じられており、とかく井の中の蛙になりがちである。農協は組合員のために何をするか、地域のために何をしなければならないかを追求し続けることがその使命であり、メンバーシップの同友会の中で系統組織以外のところからも広く情報収集することが必要であると思われ、その誘いに応えて加入した。情報を得るだけでなく情報を発信する機会も増え、幹部職員養成講座も大変良いと思っている。

新しい事業への今後の取り組み　新規就農を定期的に迎え入れている浜中でも酪農家戸数の減少に追いつかないのが現状である。1万5千haの草地を最大限に活用し食料生産を行なうことが、浜中の農村社会を維持発展するためには不可欠であるが、担い手確保をどうするかが大きな課題である。就農者研修牧場を設立し家族酪農の養成に努めリース牧場制度で就農させてきたが、この方法での新規就農だけでは結局農地の引き受け手がなくなる恐れがある。

そこで地域の酪農への異業種法人参入を目的とし、町内外の企業にも出資を求め農協出資型生産法人、株式会社酪農王国を設立した。法人経営の人材養成と法人参入支援をし、法人経営に適した規模に育成し分社化、のれんわけなどにより法人経営農場の設立を促進することを目指している。